



国立民族学博物館
国立大学法人九州大学
国立大学法人山口大学

- ・ フィンガーガイドにより、視覚に障がいのある人の触知を可能に
- ・ 両手で触ることができる新たなインターフェイスデザイン
- ・ 一般の案内図と同じ平面図を用い、かつ同じ場所に設置することで分け隔てないデザインを実現
- ・ 国立民族学博物館、九州大学、山口大学との共同プロジェクト
- ・ 2020年度グッドデザイン賞、IAUD国際デザイン賞2020銀賞（公共空間デザイン部門）に続き、3度目の受賞

デジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）が

「UNIVERSAL DESIGN competition 2021」（IUD（ドイツ Institute for Universal Design）主催）で「UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）」「UNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）」をダブル受賞しました。

【趣旨説明】

国立民族学博物館のデジタル触地図（国立民族学博物館触知案内板）が、このたびUNIVERSAL DESIGN competition 2021（主催：IUD（Institute for Universal Design）、ドイツ）において、UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）及びUNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）をダブル受賞しました（受賞日：2021年3月15日 ドイツ時間）。これは、2020年度グッドデザイン賞、IAUD国際デザイン賞2020銀賞（公共空間デザイン部門）に続き、3度目の受賞となります。

デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。タッチパネルディスプレイ上に設置したフィンガーガイドと音声案内との連動によって、館内の位置情報や展示案内を触覚と聴覚から得ることができます。フィンガーガイドは、今回新たに開発された、なぞりながら触る行為を促す新しいインターフェイスデザインです。

また、このデジタル触地図は、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトにより開発されました。本プロジェクトのメンバーである九州大学大学院芸術工学研究院の平井 康之教授、山口大学国際総合科学部の富本 浩一郎講師が主導してデザインしました。

すでに本館の展示場に2台設置され活用されており、今後も設置を増やす計画をしております。さらに標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しております。

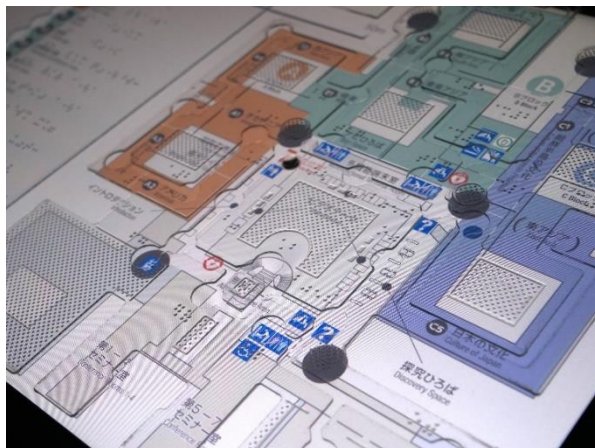


【背景】

このデジタル触地図は、国立民族学博物館の「来館者視点からの情報化」をテーマにしたプロジェクトから生まれました。「博物館の触地図は、なぜ一般の案内板と違ったデザインで、場所も離れたところにあるのか？」という素朴な疑問からスタートしました。プロジェクトの最初から視覚に障がいのある人とともに対話を進めた結果、触読に不慣れな人びとが多くいることがわかりました。現状の触地図は有効な経路探索ツールとしてJISやISOによって標準化されています。しかし、厚生労働省による『平成18年身体障害児・者実態調査結果』では、日本の点字の習得率は視覚に障がいのある人全体の十数%とされており、ごく一部の人びとしか使えない現状にあります。社会的にも、2016年4月に障害者差別解消法が施行され、博物館園では、多様な来館者に対する合理的配慮が求められています。デジタル触地図は、視覚に障がいのある人とない人が、ともに楽しむことができるユニバーサルミュージアムの実現を目指しています。

【経緯と成果】

国立民族学博物館の文化資源プロジェクトとして、研究スタッフ、デザイン専門家、潜在的来館者である多様な障がいのある人びとがともに考えるインクルーシブデザインによって開発しました。タッチパネルディスプレイの操作は視覚に依存するため、鉄道の線路と駅のように、動線を示す溝と音声ボタンの穴が一筆書きでつながった透明アクリル製のフィンガーガイドを画面上に採用しました。また既設の館内案内のデザインと共通化した、インターフェイスデザインによって、視覚に障がいのある人の「ための」デザインではなく、より多くの人びとが「ともに」利用できるデザインを目指しました。設置場所も一般の館内案内図と同じ場所に設置されています。すでに本館展示場に2台設置され活用されています。今後も設置を増やす計画です。さらに標準デザイン化を目的として特許を取得し、他の博物館園への公開と普及も目指しております。



触知案内板拡大

【審査委員による評価コメント】

審査委員メンバー

マーティン・フェスライトナー Martin Fössleitner 氏（情報デザイン、International Institute for Information Design, Austria）

「国立民族学博物館のための触地図制作の背景にある様々な配慮に非常に感銘を受けました。視覚障害者のうち点字を読むことができる人が12%しかいないということを鑑み、この触地図は両手を使うかたちで、アナログとデジタルと音声をつなぐシステムから構成されています。この点が非常に高く評価されました。」

出典：AWARD CEREMONY 2021 – MCBW Universal Design Channel 2021 – 12.03.2021

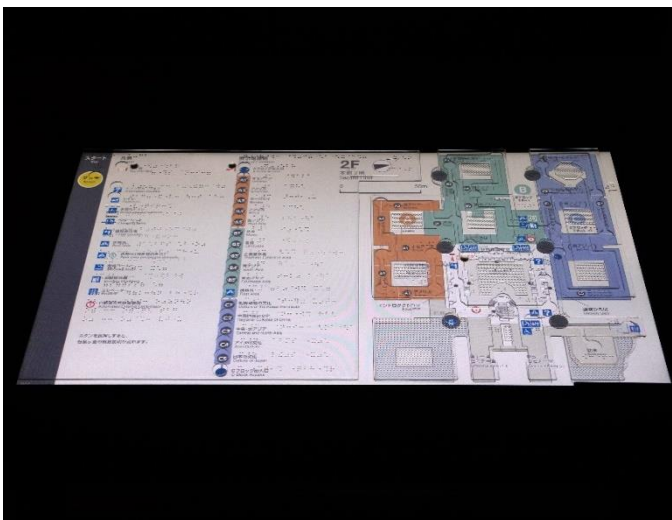
<https://www.youtube.com/watch?v=iLgoaAuaVjc> 34:00～36:30 より発言を和訳

【デザイナー（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之）からのコメント】

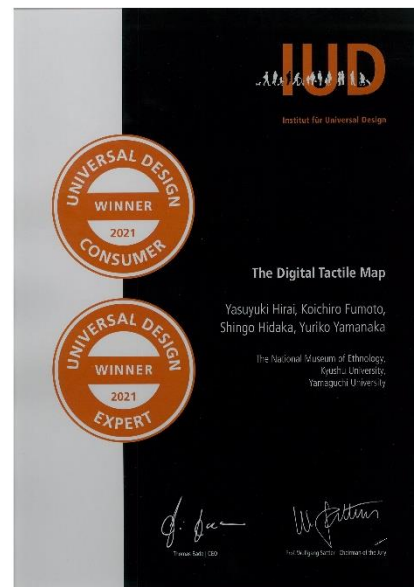
「海外の権威ある賞を受賞することができ大変嬉しく思います。特にドイツのユニバーサルデザインの専門家と消費者の両方からの評価をいただいた意味は大きいと思います。多くの皆さまのデザインへのご協力に感謝します。

デジタル触地図は、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトとして、インクルーシブデザインの視点から、これまで視覚に障がいのある人のための触地図として単独に作られてきた触地図を、視覚に障がいのある人にもない人にも使いやすい情報提供を目指してデザインしました。

プロセスの最初から障がいのある多くの人々と共に考えていくインクルーシブデザインの方法を進めてきました。そして対話の中から、これまでの触地図は点字の読める一部の人にしか使えないことがわかりました。そこで今回のデジタル触地図では、視覚に障がいのある人にもない人にも使いやすい情報提供を目指しました。今後、多様な障がいのある人々が、家で計画を立てるところから、目的とする展示物にたどり着くまで自分で選択できるようにデザインを進めていきたいと考えています。」



触知案内板 全体



UNIVERSAL DESIGN competition 2021 賞状

【詳細情報】

受賞対象名	デジタル触地図 [国立民族学博物館触知案内板] Digital Tactile Map
受賞企業	国立民族学博物館／九州大学／山口大学 National Museum of Ethnology / Kyushu University / Yamaguchi University
利用開始	2018年3月
設置場所	国立民族学博物館
仕様	【ハードウェア概要】サイズ：約W672.5×D430×H1040 / 構成：タッチパネルディスプレイ（市販品／27インチ／静電容量10点マルチタッチ）、透明アクリルに点字・触知記号を立体的に印刷した触地図、触地図アプリ制御用パソコン（市販品／windows8.1）、筐体（手すり：ステンレス／筐体：メラミン仕上げ） 【ソフトウェア概要】動作環境：windows8.1
プロデューサー	国立民族学博物館 吉田 憲司（よしだ けんじ）
ディレクター	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之（ひらい やすゆき）
デザイナー	九州大学大学院 芸術工学研究院 教授 平井 康之 山口大学 国際総合科学部 講師 富本 浩一郎（ふもと こういちろう） 国立民族学博物館 教授 日高 真吾（ひだか しんご） 国立民族学博物館 教授 山中 由里子（やまなか ゆりこ）

【UNIVERSAL DESIGN competitionとは】

Institute for Universal Design(ミュンヘン、ドイツ)が毎年主催する、ユニバーサルデザインのコンテスト。UNIVERSAL DESIGN consumer(消費者賞)は、14歳から85歳までの幅広い層の消費者100人によって選ばれ、UNIVERSAL DESIGN expert(専門家賞)は、商品デザイン、情報デザイン、サービス・デザイン、建築、インテリア・デザイン、専門誌編集者などからなる審査委員会によって厳選される。例年は応募製品・プロジェクトが、Munich Creative Business Weekの一環として、オスカル・フォン・ミラー・フォーラムに展示され、そこで授賞式が行われるが、今年は新型コロナウイルス感染症の世界的流行を受け、審査会、授賞式などがオンラインで配信された。

参考URL <https://www.universal-design.org/universal-design-competition>